

若手抗酸菌研究者の育成と抗酸菌研究会

岡山大学学術研究院医歯薬学域

教授 大原 直也

皆様、抗酸菌研究会をご存じでしょうか。この場をお借りして抗酸菌研究会を紹介させていただきます。私は昨年末まで抗酸菌研究会の会長をさせていただき、研究会の立ち上げに関わるという貴重な体験をさせていただきました。

結核や非結核抗酸菌症を対象とした学会の中心的存在に日本結核・非結核性抗酸菌症学会があります。この学会の会員数は増加傾向にあります。対して、抗酸菌の研究者、特に基礎系の研究者は増えておらず、抗酸菌の研究を行っている研究室の数も減少傾向にあると感じています。研究室や研究者数が減ってきますと、世界における日本全体の研究の質が懸念されるようになります。中堅の抗酸菌研究者の中にもこの状況を危惧した先生方がおり、彼らはこの懸念に対して動き始めました。最初に行ったのは、抗酸菌を研究の対象としている研究者同士が意見を交換できる場を設定することでした。2016年春のことです。結核病学会（当時）や日本細菌学会など、関連する学会の総会の際に懇親会を開催しています。集会の手応えを感じたところで、次に研究会を開催する運びとなりました。これには琉球大学松崎吾朗教授の協力が大きく、2016年9月に琉球大学において第1回抗酸菌研究会が開催されました（図1）。松崎教授は現在抗酸菌研究会の会長を務めら

れています。もう一人、大きな協力のあったのが日米医学協力計画抗酸菌症部会長の北海道大学鈴木定彦教授です。鈴木部会長は抗酸菌研究会で発表した若手の優秀発表者に、日米医学協力計画が主催する国際会議で発表する道筋を作られました。

ところで、抗酸菌に関連した学会や研究会は、日本結核・非結核性抗酸菌症学会をはじめ、いくつかあります。その中で、抗酸菌研究会の存在意義はどこにあるのかを考えてみます。一言で言いますと「研究領域や所属学会を超えて抗酸菌研究者が集う場を提供すること、そして、国際的に活躍する次世代研究者を育成すること」になると思います。抗酸菌を研究の対象としている、と言っても、研究の方法や目的といった抗酸菌の扱い方、また各研究者が所属している学会や研究会はまちまちです。前者については、図2に研究領域に関連するキーワードを思いつくままに並べてみました。黒色は主に菌側を研究する際のキーワード、白色は主に宿主側、灰色は公衆衛生や臨床に近いものです。また獣医細菌学や魚病学など、宿主としてヒト以外の動物を対象としている場合も多いです。さらに生物学的観点から、病原性の無い抗酸菌のユニークな物質合成経路を研究対象としている研究者もいます。キーワードが変われば、所属学会も必然的に変わってきま



図1. 第1回抗酸菌研究会参加者集合写真

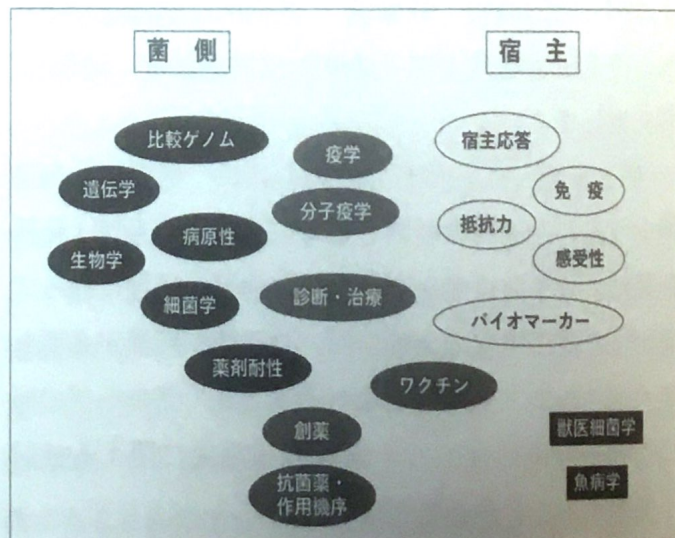


図2. 抗酸菌を廻るキーワード

す。そうすると同じ抗酸菌を研究対象としているにもかかわらず、お互いに顔を突き合わせ、議論する機会が無いといったこととなります。例えば、日本結核・非結核性抗酸菌症学会は臨床系の色合いが強い学会に映り、入会していない基礎研究者は多いように思います。日本細菌学会を考えますと、逆に加入している臨床系の研究者は少ないです。様々な研究領域のすべてをカバーできている学会や研究会は無いように思います。繰り返しになりますが、研究領域や主たる所属学会の枠を超えてお互いに知り合い、議論する場となるのが、抗酸菌研究会の最大の特徴であり、存在意義ということになります。その結果として、次世代を担う世界に伍して活躍する若手の研究者が育ち、研究に関するネットワークが構築できることを目指しています。

さて、抗酸菌研究会はこれまで4回の集会が開催されました。前述しましたように、ボトムアップ型の研究集会で、6年半が過ぎた今もその形態は変わらず、研究会は中堅の先生方が運営されています。彼らが当初目指したように、様々な研究領域の研究者が参加しています。2回目からは、参加者は100名を超えています。表1に参加者が主に活躍している学会を示します。実際にこのように多岐に亘っています。また、発表者の所属機関も表2に示すように、様々です。学部学生の発表もあり、さらに留学生の発表が毎回23割を占めています。本研究会の参加者について、特筆すべき点があるのもう一つあります。それは抗酸菌研究の大御所の先生方をはじめ、著名な先生方も多く参加されていること

です。若手の発表に対して積極的にコメントをいただいています。

広い領域の研究成果を発表できるように、参加はオープンで、参加費は無料です。また、論文や学会発表前の最新のデータを発表しやすいように、発表内容に関しての守秘に関して、紙面での誓約書の提出が必須となっています。重要なポイントになろうかと思いますが、若手の発表を優先しており、上述したように若手による優秀な発表については、国際的な場での発表の機会が与えられています。また、意見交換の重要性ということで、会期中に意見交換会が開催されています。

研究会の発展には、抗酸菌研究会の名称を広く知っていただくことも重要です。日本結核・非結核性抗酸菌症学会ではジョイントシンポジウムを企画していただきました。また、次回の日本細菌学会でもジョイントシンポジウムを企画していただく予定です。

最後になりましたが、皆様にはこの黎明期にある抗酸菌研究会に興味をお持ちいただくとともに、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。🐾

表1 抗酸菌研究会発表者が主に活動している学会

日本結核病学会	日本細菌学会
日本ハンセン病学会	日本免疫学会
日本生体防御学会	日本公衆衛生学会
日本感染症学会	日本薬学会
日本臨床微生物学会	日本顕微鏡学会
日本呼吸器病学会	日本生物物理学会
日本化学療法学会	日本生物工学会
日本ワクチン学会	日本農芸化学会
	他

表2 抗酸菌研究会発表者の所属機関

医療系各学部, 大学院, 研究施設
獣医系各学部, 大学院, 研究施設
理学部, 理学系大学院
農学部, 農学系大学院 (含水産学部, 海洋系大学院等)
国公立医療系研究機関
病院診療科
地方衛生研究所
医学部, 歯学部学生